

◆世界言語学名著選集◆

第7巻

言語学の問題と方法

ヴァルトブルグ著 島岡茂訳

江苏工业学院图书馆
藏书章

ゆまに書房

◆世界言語学名著選集◆

第7巻 言語学の問題と方法

1998年3月13日印刷

1998年3月23日発行

著者 ヴァルター・フォン・ヴァルトブルク

訳者 島岡 茂

発行者 荒井 秀夫

発行所 株式会社ゆまに書房

東京都千代田区内神田2-7-6

電話 03(5296)0491 (代表) 振替東京00140-6-63160

印刷所 互恵印刷株式会社

製本所 東和製本株式会社

◆落丁・乱丁本はお取替致します。

ISBN4-89714-413-2 C3380

凡 例

○「世界言語学名著選集」は、20世紀の言語学史を辿る上で貴重と思われる国内・国外の著作を選び、海外で刊行されたものに関しては邦訳版を、国内で刊行されたものに関しては初版本を復刻集成したものである。

○構成は次の通りである。

第1巻 美学〔世界大思想全集46〕(ベネット・クローチェ著 長谷川誠也・大槻憲二訳 1930年刊・春秋社)

第2巻 言語学史(ヴィルヘルム・トムセン著 泉井久之助・高谷信一訳 1937年刊・弘文堂)

第3巻 言語の構造(泉井久之助著 1939年刊・弘文堂)

第4巻 言語民族学〔新学芸叢書〕(泉井久之助著 1947年刊・秋田屋)

第5巻 言語と人間〔哲学叢書〕(ヴィルヘルム・V・フンボルト著 岡田隆平訳 1948年刊・創元社)

第6巻 言語理論序説〔英語学ライブラリー41〕(ルイス・イエームスレウ著 林栄一訳述 1959年刊・研究社)

第7巻 言語学の問題と方法(ヴァルター・フォン・ヴァルトブルク著 1973年刊・紀伊國屋書店)

第8巻 ことばの不思議(ウォルター・ポルツィヒ著 金子亨・諏訪功・野入逸彦訳 1973年・白水社)

○第2巻のみ115%に拡大して収録し、他の巻は原寸にて収録した。

○この度の刊行にあたり、再録を御許可下さった各機関・関係各位に深く謝意を表する。

初版の前書き

本書は学生と素人を対象にしたもので、今日言語学研究で重要な地位を占める諸問題の手引きをすることを目ざしている。同時にまた、これらの問題の解決にいかなる方法が用いられているかを、若干の例によって示すことができよう。もちろん紙面の制約から、多くを選ぶわけには行かない。そこで言語の生涯の多くの重要な局面が省かれ、広大な観察の場が未踏のまま残された。われわれはある基本問題だけに注意を集中し、他にはふれずにおくことを得策と考えた。これらの問題の中、多くは長らく学者の関心を引いてきたものだが、中にはここ数十年以内にはじめて研究、発見されたものもある。ここではすべてがとり上げられるが、その年代や系統は問題にされない。重要なのは、これらの問題が、それを含む有機体内部でどんな位置を占めるかということである。その「現代性」はここでは興味もないし、意義をもたない。本書はあくまで言語学に接したばかりの読者をめざすものだから。とは言え、本書は言語学がようやく研究対象として認めた一つの目標を一貫して目ざしている。この対象は究極まで追及すれば言語現象の本質まで掘下げ、計り知れない成果を約束する。つまり、言語の構造的歴史がそれである。もちろん本書がただそれだけの目的に捧げられているわけではない。目次を一瞥しただけでそれはわかるだろう。しかしこの展望は作品全体を制約している。だから序論でかるく公式的にふれた後、言語と言、共時態と通時態の関係などの問題が第三、第四章になって再び現われるのである。これらの問題が初めの部分でとった順序はそこでは逆になり、その間に蓄積された経験によって解答を得ている。

言語は大きな全体のすなわち人間存在の全体の部分としてのみ理解できる。言語はあらゆる点で存在に交わり、そのあらゆる表現に付随する。力と事件との相互作用の例としては末尾の『言語と民衆』をよんで頂きたい。

第二版の前書き

今日、第二版が刊行される著書は、ドイツ語の原著でも、フランス・スペイン語の翻訳でも、すでに長い間絶版になっている。本書の再版を望む声は多方面から寄せられている。ところが、私のあらゆる余暇と精力とをフランス語語源辞典 (FEW) に注がなければならなかったため、過去 20 年の言語学の発展によって必要になった増補をこの本に施すことができなかった。かくして長い期間、この計画は実現されなかった。私の懇請によってステフェン・ウルマン S. Ullmann が二章の追加を引受けてくれなかったら、この計画はおそらく実現されなかったろう。すなわち『音声学と音韻論』(第二章, 2, d) と『言語と文体』(第五章) とである。

さらに、私の親しい同僚ウルマンは多くの考えや表現の仕方をもって本書の充実に貢献した。大幅に増補された参考文献もかれの努力によるもので、ますますふえている言語学文献の中、とくに重要なものを読者に紹介するだろう。

目 次

初版の前書き

第二版の前書き

第 I 章 序 論 1

1. 言語学の対象 1
2. 言語学の発展段階 2
3. 言語と言 4
4. 共時態と通時態 6
5. 言語の地方的分化 11

第 II 章 言語とその進化 14

1. 問題の要旨 14
2. 音声的過程 14
3. 形態論 53
4. 語の形成 80
5. 統辞 93
6. 語彙 105

第 III 章 歴史言語学と記述言語学：その相互関係 135

1. 言語における存在と生成 135
2. 語とその周辺 152
3. 未来の研究のための結論 170
4. フランス語の構造とその歴史的基礎 174

第 IV 章 言語と言 189

第 V 章 言語と文体 194

1. 言語の文体論：選択と表現性 196
2. 個人の文体論 204

第 VI 章 言語と民衆 208

参考文献 229

あとがき 233

索引 235

第 I 章

序 論

1. 言語学の対象

言語学の対象、言語は、明らかに学問がとり上げる最も複雑な素材の一つである。第一に認知される部分は、音^{おん}という物理学に属する現象である。これらの音は人体のさまざまな器官（肺・喉頭・口蓋垂・舌など）の共働から生まれる。それは生理的起原をもち、その解明のためには人体の諸器官の関係を考察することが必要になる。口から出て、他者が聴きとる音声は一連の心理的過程に密接につながっている。一つの音群には一定の意識状態が対応する。それはある心理的素材に関係している。Baum「木」という音の連続はドイツ語の適用範囲では「木」の表象と密着している。この連結は語から表象に移ることも、表象から語に移ることもある。すなわちその語を聴くと、その映像が心に浮ぶし、意識に映像が現われれば、たとえ発声器官で調音されなくても、映像は語を喚起する。映像と語の連結はそれほど不可分なものだから、どちらの方向にも同じように往来できる。話し手にとっても、聞き手にとっても、音群のそれぞれに一つの言語概念が結びつく、言わば体験の一部が意識にのぼり、それがある音の連続に結びついていわゆる語を構成する。このように、言語は人間の四つの構成要素：物理的、有機的、道徳的、精神的領域を一巡する。¹⁾ それはその全部に平等に所属し、その作用によって四者を有効に協力させる。これら言語現象の複雑性によって、言語学が扱う事実を正しく決定することは著しく困難になる。

しかしこの他にも問題がある。言語は各人の中に能力として生きているが、この能力には二つの面がある。つまり、他者にわかるように自己を表現する能

1) この実存の四層の関係については：N. Hartmann, *Das Problem des geistigen Seins* 「精神的実存の問題」, Berlin-Leipzig, 1933.

力と、聴きとったものを了解する能力、すなわちそれを精神的、心理的内容に結びつける能力である。ところで現象に表われる言語はつねに部分的でしかない。それは、言行為によってのみ有形・具体的な実在を得る。個々の話や文の中で、潜在的に個人の言語能力を構成するもののごく一部だけが言わば動員され、具体的現実^{じつじ}にまで引上げられる。ここから、言語の中にすでに創造・完成され、自由に駆使できる機構、つまりエルゴンを見る人と、逆に、言語に創造的な力、活動性、つまりエネルゲイアを与える人との昔ながらの対立が生まれてくる。

2. 言語学の発展段階

これら言語現象の複雑性によって、時の流れとともに、言語を理解しようとする努力の中に起った大きな変遷が、少なくとも部分的にはわかるのである。文法研究の発展の跡を一瞥すればこの変遷は明らかになる。

多少とも傍系にあたるインド人を別にすれば、文法の創始者はギリシア人であった。かれらを支配したのは、正しいものと正しくないものとを区別できる規範を発見し、これを強制しようとする努力だった。この教規はなによりも規範的な意義と価値とをもっていた。これを支配するものは、純粹に客観的な考察ではなく、言語関係をできる限り論理に調和させ、わかりやすい型に流しこもうとする欲求だった。こうした論理的・教訓的文法は近代でも、とくに、16-17世紀のフランス人によってとり上げられ、さらに発達させられた。

この種の言語学に文献学が並んだのは18世紀も末だった。1777年にはヴォルフ F-A. Wolff が古文獻の比較批評を始めた。その究極目標ははじめから原典の復原と解釈にあった。言いかえれば、言語そのものより、文献テキストのための言語研究だった。つまり作家の言語の研究は、その文芸上の秘密の発見と、作品の成立をよりよく知ることを目的とした。もちろんこの学問は書く言語だけに専念し、話す言語は関心の対象にならなかった。とは言え、この学問は古い言語学のように、正しい表現法の教育を目ざすことなく、その作家の時代のありのままの言語状態をつかもうとした点で、前の段階とは区別された。問題はもはや何が正しいかではなく、何があるのかであった。

批判的原典比較から、ついには言語の比較が生まれた。18世紀の末ごろ、サンスクリットが発見された。それまでは細部の関係がわからぬままに、大筋で

は認められていた二つの古典語の同族関係が、今や決定的に解明された。ギリシア語とラテン語の関係は、この新しい言語の登場によってはっきりしてきた。たとえばつぎの形の並存：

ラテン: <i>genus</i>	ギリシア: <i>genos</i>
<i>generis</i>	<i>geneos</i>
<i>genera</i>	<i>genea</i>

は、これまでは、なんの結論をも許さなかった。ところがこれに対応するサンスクリットのリストをみると、三つの言語の関係は一挙にはっきりする：*janas*, *janasas*, *janassu*。根源の *s* はサンスクリットではまだ存続しているが、ギリシア、ラテン語では語尾だけに見られる。母音の間ではラテン語では *r* になり、ギリシア語では完全に消えている。ここから三つの言語が同一語族に属することが明らかになる。それは共通の原始言語に基盤をもち、その一つではもとの言語が忠実に守られているのに、他の二つでは大きな変化が起こっている。そこからこれらの言語を相互に比較し、同族言語の間にある関係を特別な学問の対象にしようとする意図が生まれた。事実、ある言語の音や形態を他の言語を使って解明することは、この時代にはじめて知られた。この比較言語学の創始者はボップ F. Bopp で、かれは 1816 年にその著： *Über das Conjugationssystem der Sanskritsprache* 「サンスクリットの動詞活用体系」¹⁾ を刊行した。この種の研究はシュライヘル Schleicher によって完成され、その *Compendium der vergleichenden Grammatik der indo-germanischen Sprachen* 「インド・ゲルマン比較文法論」(1861) の中で、かれはその時まで言語の比較研究で得られたすべての成果をまとめている。

言語の比較研究から一步をふみ出すと、言語の歴史になる。しかし比較言語学者は異なる言語間関係を立証するに止まり、この知識を歴史的に関係づけることは考えなかった。そのため、本来の言語生命を正しく理解できなかった。

この比較から歴史への移行は、長い文字の伝統をもち、そこから歴史的研究へと誘われ易い二つの領域：ゲルマン語とロマン語で実現された。ここで言語発達史の概念を創造するのにとくに寄与したのはディーツ F. Diez の *Grammatik der romanischen Sprachen* 「ロマン語文法」(1836) である。ここには二千年に亘

1) ボップの先行者 (W. ジョーンズ, F. シュレーゲル, R. ラスク) については：O. Jespersen, *Language: its Nature, Development and Origin*, London-New York, 1934, p 32 ff.

る発展のあとを踏破し、観察する可能性があった。このイニシャチーブはとくに1870年ごろから青年文法学派によって、比較言語学のあらゆる成果に拡大された。事実を自然な連続の中に見たのはかれら青年文法家(ブルクマン Brugmann, オストホフ Osthoff, ブラウネ Braune, ジーフェルス Sievers, パウル Paul)であった。

ところで、今日の問題提起や考え方一般がかれらのそれとどれほど離れているか、以下の詳論がこれを示すだろう。

3. 言語と言

ところで今や、われわれはさきに提起された問題、すなわち言語はエルゴンなりや、エネルギー、すなわち活動性なりやという問題に立戻ることになる。そしてこれに答えるためには、言の機構を念頭におく必要がある。¹⁾ 独白を除けば、言は少なくとも二人の人間を前提とする。それは、対話を始める人のある意識状態、ある心理素材を出発点とする。この意識状態は概念の明晰性をもつこともあるが、かなりあいまいな表象の状態に止まることも多い。どちらの場合にも、それはある言語記号、聴覚形象と結びついている。たとえば *Apfel* 「りんご」という表象なり観念なりが意識に現われると、ドイツ人の脳裡には *Apfel* という語を形成する音の連続が喚起される。つぎに対話が開始されると、意識の中に喚起された音形象は、発音器官によって物理的現実になる。かくて心理的過程のあとに生理的過程がつづく。そして発音器官から出た音波が、話し手の口から出て聴き手の耳に達する範囲では、それは物理的過程になる。聴き手の側では、この過程は方向が逆になる。音波の物理的効果は生理的に耳から脳に伝わり、そこで音波が伝える音の全体が習慣的結合によって表象なり概念なりを喚起する。²⁾

1) ここでは基本的にはソスニール (*Cours de linguistique générale*, Paris, 1955) の分析に従った。《言語》と《言》との区別については: E. Coseriu, *Sistema, norma y habla*, Montevideo, 1952; N.C.W. Spence, A Hardy Perennial: the Problem of «la Langue» and «la Parole», *Archivum Linguisticum* 9, 1957, 1-27. 《言語》と《言》の間に媒概念《個人言語》を挟む試みについては: C.F. Hockett, *A Course in Modern Linguistics*, New York, 1958, p. 321 ff.

2) 行動心理学にヒントを得て、アメリカの言語学者ブルムフィールド (*Language*, New York, 1933, p. 22 ff.) は言の行為は刺激と反応の連続と考えた。非言語的刺激(s)が話し手に言語的反応(r)を惹き起すと、かれは語なり文なりを口にする。このメッセージは音波となって空間をわたり、話し相手に言語的刺激(s)として働きかける。かれは直ぐに、または後になって、たとえば与えられた命令を遂行することにより、非言語的反応(R)で答える。記号で示せば: $S \rightarrow r \dots s \rightarrow R$. や異なる分析として: K. Bühler, *Sprachtheorie* 「言語理論」, Jena, 1934, p. 28.

この全過程の中心は、観念から語へ、所記から能記への移行、またはその逆の中にある。話し手の側ではこの移行は観念から語へ、内部から外部へ向けて行われ、聴き手の側では逆に、語から観念へ、外部から内部へ向って行われる。前者では人は能動的で、自己の一部を提供するが、後者では受動的で、もっぱら受け入れるだけである。この両者が可能になるのは、すべての陳述(文など)で大きな役を果す連合の能力、付加や配列の力による。ただ、どうして個人の間でこのような了解が成立つかははまだわかっていない。これらの力が作用できるのは、言語の超個人的本質と、それが社会的行為である事実による。同一の言語共同体に属する個人の間では、個々の言語記号には一種の平均価値が存在、または発生する。同一記号が少なくともほぼ同一の観念と結合し、すべての個人によって同じやり方で再生される。この連合を可能にするさまざまな印象は、それを外部からとり上げ、一定の順序に配列する能力から生まれる。言語は現実の中に行為の形をとって現われる限り、個人に結びつく。言語の能動的な面は個人に帰属する。もちろんそれが可能になるのは、個人を統合する言語の共通意識に基づくからである。かかる超個人的意味において、言語は個人の中に蓄積された語の形態・連合の総和である。それは個人の全体の中に潜在的に存在する、完成した総体的表現体系を構成する。

そこでわれわれもソスュール Saussure とともに、言語と言とはっきり区別する。言語は社会的行為であり、言は個人的行為である。言語は基本的なものの一切を含み、大きな全体を構成する。言はこの全体のごく一部を喚起するに止まり、この全体を使って、特殊な、瞬間的な、厳密に個人的な思考や感情を表明する。

そこで、言語と言の間には、ある相互関係、ある周期的運動が存在することになる。いかにして言語が個人の中に徐々に同化されてゆくかを調べてみると、言語を生み出すものは明らかに言であり、より正確に言えば他者の言であることがわかる。個人はその成長の過程で耳にした語や文によって、徐々にその民族の言語共同体に入ってゆく。これらの語や文は言に属するもので、他者の言語の中に根ざしている。これらの言が幾度となく反復されて遂には意識の中に刻印され、言わば沈澱した形で、少しずつ言語に変わってゆく。もちろん、言(聞いたり読んだりした)の言語への変化は成人の場合にも停止することはない。かれもまた、時に新しい表現の可能性を受け入れ、それをじぶんの言語意識の中にとり入れてあとから利用する。ただこれらの変化はごく微細なため、

子どもの場合のように大きな成長の印象を与えない。

この区別はまた同時に、さきに提起された言語はエルゴンか、エネルギー、すなわち活動力かという問題に終止符をうつ。上に定義した狭い意味では、言語はエルゴンであって、そこでは言語共同体のあらゆる成員がその中で生活し、しかも知的に生活できる普遍的な精神財産である。それは民族が個人に委託し、預けておく巨大な相続財産である。そこには長い世紀に亘る体験が包蔵されている。個人はそれを財産として受けとり、それに対して受動的な容器の役を果すにすぎない。さらにこの遺産は、かれと同一言語を話す他の人々との間に共同の領域をつくり出す。個人は自己の力だけで言語を変える能力をもたない。この意味では言語は純粋な心理現象であり、それを使う道具の物理的・生理的活動とは無関係である。それは聴覚記号の体系で、そこでは意味と音全体との連合だけが本質的なものになる。

一方、言についていえば、それは個人が言語を使用する一時的、特殊なやり方である。言語の常に限定された一部が、言によって潜在状態から行為の領域に移転される。言は個人の意志の行為であり、そこには二つの面が区別される：1. 話している主体がじぶんの思考を表わすため言語体系を利用するやり方；2. 外の世界に自己を表現することを可能にする物理的・生理的活動。

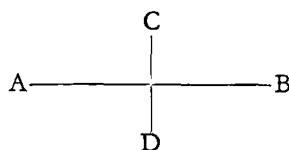
この言語と言の区別は基本的重要性をもつ。言語は社会・共同体・体系を表わし、言は逆にこの体系の個人的な開発・利用を表わす。この事実を不断に念頭におくなら、多くの誤りが避けられる。この言語と言の関係や相互依存の問題については、以下、充分な事実の裏づけを行った後、再び巻末でとり上げることにする。¹⁾

4. 共時態と通時態

ここで再びさきにあげた言語学の進化に関する簡単な要約に立戻ることにする。われわれはすでにこの進化を言語の歴史的研究に到達する時点まで跡づけ

1) 各言語は言わば固有のコードを構成し、話し手は言の中でこのコードを使ってじぶんのメッセージを記号化し、つぎに相手がそれを解読するのである。このコードの概念によって言語学と情報理論の間に創造的関係を樹立することができた。この問題については：P. Guiraud, *Langage, connaissance et information* 「言語・知識・情報」(*Journal de Psychologie* 55, 1958, 302-18); *Problèmes et méthodes de la statistique linguistique* 「言語統計学の問題と方法」, Dordrecht, 1959. さらに：C. Cherry, *On Human Communication*, New York-London, 1957.

た。そこに記録された成果は驚くべき広さを持ち、この事実が何世紀もの間、気づかれなかったことが不思議にさえ思われた。他方、歴史言語学は科学としてある法則(音声法則)の存在を発見したことから、単に事実を確認することだけで満足した在来の記述文法に対して優越感をもっていた。1800-1900年にわたっては、言語学といえただその歴史的・比較的部分だけを意味した。この見方に反対して、言語の記述的研究も歴史的研究に劣らず科学的に処理できることを強調したのがソスニールである。かれは記述言語学と歴史言語学との対立をとくに力説した。そしてこの二つの展望を二本の軸の方式によって定義し、例証している：



軸 AB は同時性を、CD は継続性を表わす。歴史的、進化的言語学は、時間的、空間的に隔った異なる言語状態を相互に比較しつつ研究する。たとえばつぎの対比：

ラテン：	<i>maturu</i>	古仏：	<i>meür</i>	「熟した」
	<i>cantata</i>		<i>chantée</i>	「歌われた」

からつぎの結論が得られる：古典ラテン語と古仏語との間で——つまり1世紀から12世紀の間に二つの母音にはさまれた *e* が消失した。そこで歴史言語学はできる限り一切の徴候を利用して、たとえばこの現象が正しくどの時代に起ったかを決定しようとする。それはまた歴史の中ばかりでなく、空間の中でも比較を試みることができる。たとえばプロヴァンス語ではこの *e* が *d* の形で維持されていることを発見したり、*e* が完全に消えた区域と、有声化して *d* になった地域との境界を決定することもできる。いずれの場合にも、時間の中で起ったことか、地理的空間に投影された時間的過程が問題になる。

しかし、時間的要因を完全に除去し、CD なる縦の交線の代わりに AB という横の交線を選ぶことも可能である。ソスニールは言語の記述的研究も歴史的研究と同様、科学的に行い得ることを公準として提示した。かれは一般に青年文法学派が認めている截面 AB に対する CD の優位を否定する。かれにとっては、すべて言語は表現手段の完全な体系であり、それは見事に仕上げら

れた巨大な絵画にも比べられる。そこでは個々の色点が他の部分と特殊な関係を持ち、どれを動かし、どれをとり除いてもその作品の内的調和が破れてしまう。言語体系の要素がもつ相互依存の関係を示す有名な例を引くと、フランス語では主格と対格の形態上の同一性と、主語-動詞-目的語という語順の厳格な固定性との間には内的な関連性が存在する。*le père punit le fils*「父は息子を罰する」のような文は、語順に関する限り決定的に固定している。つまり、この順序だけが動作する主体を、動作を受ける主体から区別する唯一の手段である。そこで、時間的過程の他にも因果の関係は存在する。表現体系としての言語の内面で働く因果関係があるのである。¹⁾

ソスュールはこのように言語を二つの部分：動的・歴史的・通時的な部分と、静的・記述的・共時的な部分とに分けている。だがかれの活動も青年文法学派のさいごの代表者たちの考えに影響を与えることはできなかった。その著 *Prinzipien der Sprachgeschichte*「言語史の原理」(五版, 1920)で、パウルは言語が歴史的研究によらずに、科学的に考察できることに、はっきり異議を唱えている。かれは言っている(p. 20):「歴史的研究によらずに、言語を科学的に考察できると主張するものがあるが、私はこれに異議を唱えざるを得ない。歴史的でなくて、なおかつ科学的な研究と言われているものも、根底では不完全な歴史的研究にすぎない。つまり一部は観察者の誤りから、一部は観察素材の欠陥から不完全なのである。単なる細部の確認をこえ、現象を正しく理解するため、現象の間にある関係を樹立しようとすればもはや歴史の領域に入る。」とはいえ、すでにソスュールより20年も前(1884年)に、マルティ A. Marty はこの区別の必要をはっきりと表明していた。²⁾ しかしかれの警告は当時まったく反響なく見送られた。それはかれが哲学者として問題にとり組んだこと、そしてかれの世代がこの方法には多くを期待しなかったので、あまり好意的でなかったためである。ソスュールはマルティを知っていたとは思われないが、この二人が、一人はもっぱら言語から、他は哲学から出ながら、同一結論に達したことは注目に価する。

さて、この支配的なアンチノミーはすでに1836年からフンボルト W. von Humboldt によってはっきり認められ、表明されていた。その著 *Über die*

1) この他の力も作用したことを示すため、後章でこの例に立戻るだろう(p. 179)。

2) これらの立証のためには: O. Funke, *Innere Sprachform*「言語の内的形態」, *Eine Einführung in A. Marty's Sprachphilosophie*「A. マルティ言語哲学序論」, Reichenberg, 1924, p. 20-25.

Verschiedenheit des menschlichen Sprachbaus und ihren Einfluss auf die geistige Entwicklung des Menschengeschlechtes 「人間言語構造の多様性と、その人類の精神的進化への影響」で、かれはつぎのように言っている:¹⁾「他方において、言語は内的存在の媒体である。それは徐々に内的認識と表現に達してゆくこの存在そのものである。...だからこの観点に立たぬ限り、言語の形成に関する疑問にも、言語の内的生命を成すものや、同時に言語の間のもっとも重要な相違の源泉についての疑問にも、根本的な解答を与えることはできない。もちろん、そこには言語の比較研究の素材を見出すことはできない。それはあくまで歴史的に扱うべきものである。しかし、根源的事実を理解し、内的連帯をもつ有機体としての言語を直覚するためにはこれ以外に道はない。しかもこの直覚は、個人のより正確な評価を容易にするものである。」しかし 19 世紀におけるその後の言語学の発展はここから出発したものではない。この基本的区別を強調するため、もう一つソスュールの証明から借りた簡単な例を引用したい。垂直軸と水平軸との間になんら関係がない決定的な証拠として、ソスュールはドイツ語と英語の母音変異による複数形成をあげている。英語では語 *fōt* 「足」は、最初は複数形で *fōti* になった。そこで変異が起ったのだが、この純粹な音声現象はそれだけでは複数の形成とはなんら関係がなかった。それは複数形 *gasti* 「客」の *a* を *ä* (*gäste*) に変えるのと同じ理由で、ドイツ語の動詞 *tragit* 「運ぶ」を *trägt* に変えている。英語の *fōti* の *ō* も同じことで、これが *ē* に屈折して近代英語の *feet* ができたのである。この音声進化は、まさにこの点で複数形成の体系を、他のまったく別な体系で置きかえた。この過程はなんら形態的要因をもたない。なんの形態変化も行われていないのである。ソスュールはこれをつぎの図表で表わしている：

fōt fōti A 時点

fōt fēt B 時点

かくて共時言語学では、複数の形成は A 時点では *fōt-fōti* の型により、B 時点では、*fōt-fēt* (母音変異) の型によって行われたと認定するが、通時的に考察すれば *ō* が *i* の前で屈折して *ē* (のちに *ee*) に変わったものと認定する。一見すると、ソスュールの見解は説得力をもつ。なぜなら A の状態には *i* の前で強勢母音の変異を要求したり、予定する原因は何一つないからである。だか

1) Berlin 1836 (*Königl. Akad. d. W.*) p. xviii. (複写版, Bonn, 1960).

ら水平軸と垂直軸との間にはなんら直接の関連はないようである。さらに引用すれば：

「これらの変化は決して体系全体に起るものではなく、そのいずれか一つの要素の上に現われるものだから、この要素を離れて研究はできない。もちろんどんな変化でも体系そのものに影響するのは当然だが、最初の動因はただ一点に関係するだけである。それは、そこから起る全体の結果とはなんら内的関係をもつものでない。この継続的辞項と共在的辞項との、部分的事実と体系的事実との本質的相違は、両者を単一科学の素材にすることを不可能にしている。」

また別の個所でソスュールは言っている：「時間の中の関係と、体系の中の関係とは、同時に研究することは絶対できない。」

もちろん、このような非妥協的な考え方には限界がある。¹⁾ なぜならこの相違は対象そのものばかりか、観察者の見方の中にもあるからである。ソスュールの考えそのものも、極端まで進めれば、同じように基本的関係の一部を蔽いかくすことになるだろう。この問題については p. 135 以下を参照。とは言え、現代の言語思想に決定的影響を及ぼすことになったソスュール学説のもう一つの面を強調する必要がある：ある時点に存在する言語は「すべてが相互関係をもつ一つの体系」、つまりその構成要素が互いに依存し、決定し合っている構造である。ソスュールは言語体系をチェスのゲームにたとえて、この考え方を例証している。「ゲームの状態は言語の状態とうまく対応している。個々の駒の価値が盤上の位置で決まることは、言語の中で個々の辞項が、他のあらゆる辞項との対立からその価値を得るのと同じである」(p. 125-126)。そこから「言語は形態であって実質ではない」(p. 157, 169) という有名な公式が生まれる。この構想によってソスュールは、今日、構造言語学とよばれるものの土台を築いた。現在、いくつかの構造学派があり、その方向はかなり異なっているが、どれもこの基本原理では一致している：直接ソスュールの学統をつぐジュネーブ学派；プラハ学派；ロンドン学派；コペンハーゲン学派の「言語素論」Glossematik その他である。アメリカでもブルムフィールド Bloomfield とその後継者たちの研究が同じような結果に到達している。本書も、形式に流れた構造主義の行き過ぎを避けながらも、同じ原理に着目し、しかもそれを通時的展望

1) 歴史言語学を孤立した方法としか見なかったパイイの見地も同じだったようだ。